

月刊

# いじろのとも

悪と悪

第十三卷

三月号

悪の枢軸には  
悪の頭目で  
対抗する

## 日本の凋落の原因

かつて日本は  
バッシングされ  
バッシングされた

それは  
他己（信仰）の喪失  
にあるのだが

## 正義と不正義

そしていまや  
無視されている  
先日のG7での話

ブッシュさん  
勝手な正義  
振り回し  
世界に不正義  
湧き起こさせる

日本の凋落の  
原因は  
どこにあるの

# 人生を考え直して

## みたい人は(九八)

空海『即身成仏義』解説(一)

問うていわく、諸経論の中にみな三劫(さんごう)成仏と説く。いま即身成仏の義を建立する、何の憑拠(ひょうこ)かある。

答う、秘密蔵の中に如来かくの如く説きたもう。かの経説いかん。

(1)『金剛頂経』に説く、「この三昧を修する者は現に仏菩提を証す」と。(この三昧とは、いわく大日尊一字頂輪王の三摩地なり。)

(2)またいわく、「もし衆生あってこの教に遇うて昼夜四時に精進して修すれば現世に歡喜地を証得し、後の十六生に正覚を成(じょう)ず」と。

いわく、この教とは、法仏自内証の三摩地大教主を指す。歡喜地とは、顯教にいうところの初地にはあらず。これすなわち自家仏乗の初地なり。つばさに説くこと、地位品の中のごとし。十六生とは、十六大菩薩生を指す、つばさには、地位品に説くがこ

とし。

先月号で予告いたしましたように、今月号から、弘法大師空海の『即身成仏義』を取り上げ、解説を加えていきます。

なお、今回は現代語訳は省略いたしました。原文は、漢文で書かれていますのですが、ここでは、こうした読み下し文のみを紹介します。何度も読みなおして頂きますと、味わいがあるように思えます。

この著書は、空海の多くの著書の中でも、もっとも大切なものとされています。つまり、その思想の中心をなすものとされている、ということなのです。

この『即身成仏義』を取り上げるに当たりました、文献(これまでの解説書など)を集め始めました。これまでに、六種の解説類を集めました。

なにしろ、空海がこの著作を書かれて、一二〇〇年近くが経っていますので、とても多くの解説や注釈がなされています。

実は、この『こころのとも』を書きはじめた頃、つまり真言密教の伝法灌頂を受けて間もなくの頃、金岡秀友という方の『空海即身成仏義』(太陽出版刊)という本だけは読んでいました。

この本には、はっきり書かれていなかったこともあって気付かなかったのですが、今回、新たに集めました別の解説を読みまして、この書物との新たな、感動的出会いを体験いたしました。

それは、この書のまさに出だしにあります、「(1)『金剛頂経』に説く、「この三昧を修する者は現に仏菩提を証す」と。(この三昧とは、いわく大日尊一字頂輪王の三摩地なり。)」という部分の解説を、集めた本の一冊の中で、読んだときなのです。

そこには、「この三昧を修する者」とは、「一字金輪の内証の法を修する者の意味であり、いまの引用は、智拳印(ちけんいん)を結んで 字(ボロン)を誦ずることによって、この尊の内証に契(かな)う境地に達した者は、現世に直ちに仏果を証し、即身に成仏するという意味である。」とありました(小田慈舟著『十卷章講説上巻』(高野山出版社刊)の「即身成仏義講説」二十一頁)。

\* (ボロン)は梵字です  
「新たな感動的出会い」と申しますのは、この「一字金輪の内証の法を修する」こと、つまり、「字(ボロン)を誦ずる」ことが、私が体験いたしました、まさに「入我我入(即身成仏)」そのものだったからです。この体験を、九年ぐらい前、徳島県勝浦町の「星の岩

屋」に居ますころ、四国遍路の途中、一夜の宿を乞うてこられた高野山で修行されている修行僧の方に話しましたところ、大変感心され、一夜の宿がもう一日延び、いろいろ話に花を咲かせたことがあったのです。その方は、高野山大学を卒業されており、当然ながら弘法大師空海上人に対する信仰がともあつく、上人の『般若心経秘鍵』を暗唱されていましたし、仏教や真言密教などについてもとてもよく勉強されていて、いろいろ教えて頂きました。でも、この私の体験のことが、まさに『即身成仏義』の出だしに書かれていることについては、教えて頂けませんでした。今回、始めてそのことに気付いたというわけなのです。

私の「ボロンを誦ずる」という体験について、もう少しだけ追加して紹介しておきます。

真言密教(醍醐派)の僧階(僧侶としての資格)を頂くために行う修行である「四度加行」の最初のプログラムは、「聖如意輪観世音菩薩」を本尊とする修法(しゅほう)祈りの修行)なのですが、その「念誦次第」の中で諸尊の真言を念誦する「散念誦」と呼ばれる部分があります。その中に「一字金輪」の真言を、念珠を繰りながら百回唱えるところがあるのですが、その真言の中に「ボロン」ということが含まれているのです。

私は、この真言を唱える時、きまつて本尊と自分が一体となる体験（＝入我我入）をすることができたのです。

弘法大師空海がこの『即身成仏義』の書き出しに、一字金輪のポロンを唱えることが即身成仏を得ることに最も肝要なこととして、『金剛頂経』を引用されたことは、私がしたような、ご自身の体験に基づくのではないかと、推測されるのです。

さて、体験の話はこの位にして、本文の解説に移りたいと思います。

なにしろ、真言密教には、直接、述べられた平易な「釈尊のことば」と違って、難しいことばがたくさん出てきます。大抵の解説書には、その詳しい説明がなされていますが、ここでは、専門家の方を対象とするわけではありませんので、本文の内容をご理解いただくのに最低必要なものに限らせて頂きたいと思います。

まず、「諸経論の中に」の経論ですが、経は經典で、論は論書（論蔵）のことです。これに律（戒律）を加えて、「経・律・論の三蔵」と呼び、仏教聖典の全体を表しています。

こうした諸経論の中に、「みな三劫成仏を説く」とありますが、この三劫とは、きわめて長い、無限に近い時

間のことを意味します。それぐらい長い時間をかけて人は、成仏することができる、と顕教（密教以外）では説いている、ということですが。

ところが、弘法大師空海は「いま即身成仏の義を建立する」と言われるのです。即身成仏とは、父母から受けたこの身のままで成仏する、ということですが。

それには、どんな根拠（憑拠）があるのか、ということですが、それは、密教の經典（秘密蔵）の中で、如来が次のように説いておられる、といわれるのです。

まず、「金剛頂経」という經典に次のように出ている、ということですが、（１）と（２）が引用されます。なお、（１）の文中の括弧内は、空海の説明文です。そこに出ています「三昧」（これは既に、道元でも出たと思えます）と「三摩地」ですが、どちらも同じ「サマーディ」の音写で、精神が統一された状態のことです。私の理論で言いますと、髄識（無意識）で精髓（煩惱蔵）と神髄（如来蔵）とが統合された状態のことです。完全にそうなるとき、「仏菩提を証す」ということになるわけです。それが、とりもなおさず即身成仏ということなのです。

次の（２）ですが、これは（１）の展開、あるいは説明のようになっていきます。「仏菩提を証す」れば、あるいはそうするということが「歡喜地を証得し、後の十六

生に正覚を成（じょう）ず」ということになるということです。

この文に続く空海の解説の通り、この「歡喜地」は、顯教にいう、さとの途中のものではなく、真言密教、つまり自家仏教では、初地としてのさとりそのもの（即身成仏）のことなのです。それは、法仏（法身としての大日如来）の自内証（自他一体感）を得るということです。

次の「後の十六生に正覚を成（じょう）ず」ですが、こうした自内証を得ますと、その後、十六大菩薩の徳を円満成就することができるといふことになるのです。

真言密教では、大日如来の徳と智慧（大慈大悲の徳・法界体性智）は、次にあげますように、四つの徳・智慧として実現されると考えます。そして、その徳・智慧は四人の如来が体现します。さらに、その四如来の徳・智慧が、それぞれ四菩薩に開かれて、ここでいう「十六大菩薩」となるわけです。

（１）大円鏡智（だいえんききょうち）

阿（あしゆく）如来

金剛薩（さつた）・金剛王・金剛愛・金剛喜

（２）平等性智（びょうどうじょうち）

宝生（ほうしょう）如来

金剛宝・金剛光・金剛幢・金剛笑

（３）妙觀察智（みょうかんさつち）

無量寿（むりょうじゅ）阿弥陀（あみだ）如来

金剛法・金剛利・金剛因・金剛語

（４）成所作智（じょうそさち）

不空成就（ふくうせいしゅう）如来

金剛業・金剛護・金剛牙・金剛拳

なお、これら、各如来や菩薩の徳や智慧については、また、のべる機会があると思いますので、ここでは、省略しておきます。

ここまで書いて、いろいろ文献を探していましたが、「これは」という現代語訳が見つかりましたので、省略するつもりでしたが、最後に、紹介しておきます。それは筑摩書房から出ています『弘法大師空海全集第二巻』の中にある松本照敬訳注の即身成仏義の現代語訳です。

〔（１）二教一論 八箇の証文〕

質問している。「もろもろの經典や注釈書の中に、みな、かぎりなく長い間修行して、そののちにさとりを開くことができる、と説いている。いま、あなたは、この身体のままですとりを開くことができるという意義を主張するが、どんな典拠があるのか」。答えていう。「密教經典のなかに、仏がそのよう

に説いておられる」。

「その經典の説は、どのようであるのか」。

『金輪時処軌(こんりんじしよき)』に説いている。

「この三昧を実修すれば、現にさとりを体得する」

(この三昧というのは、ボロンの一字の真言で示される人中最高の金輪王としてあらわれた大日如来の精神統一の境地である)。

また『三摩地軌』にいう。「もし人びとが、この教えに遇つて昼夜にいつでも励むならば、この世において歡喜地に至つて、のちの十六生において正しいさとりを完成する」。

解釈していう。「この教え」というのは、宇宙の真理そのものたる大日如来の自らの内なるさとりの内容を説きあかしている『三摩地軌』という偉大な教えを指している。「歡喜地」というのは、一般仏教(顯教)でいう菩薩修行の高位十階梯のうちの第一段階のことではない。これは、わが真言密教でいう十階梯のうちの第一段階のことである。詳細に説けば、『大日経』住心品の中に説かれているのと同じようになる。「十六生」とは、金剛界曼荼羅における十六大菩薩の功德を一身に生ずることを指す。詳しくは、『大日経』住心品に説くごとくである。

## 自作詩短歌等選

### ノーベル賞たった七人

創設以来百年になる

ノーベル賞を

自然科学部門で

もらった人の数は

アメリカ 二 三人

イギリス 七一人

ドイツ 六四人

フランス 二六人

日本 七人

だという

日本の受賞者七は

スイスやオランダにも

及ばないらしい

日本の受賞者の

格段に低い原因は

どこにあるのか

言葉や地理的ハンデ

真の競争がないこと

日本人同士が相手を

評価しないこと

獨創性の育ちにくさ

が指摘されるという

でも

真の原因は

日本人が

知的産出に価値を

(ソフト)

付与しないことにある

## ストレス対処法の教え

いま学校で  
ストレス・  
マネジメント教育が  
取り入れられつつある  
という

まず  
ストレスには  
よいストレスと  
悪いストレスが  
あることを教え  
悪いストレスが  
心や体に  
ダメージに  
ならないように

## 日本人の得失

日本人から  
失われたもの  
五つ

信仰心  
規範性  
倫理観  
忠誠心  
連帯感  
逆に  
増やしたもの  
五つ

陰険さ  
不安感  
不信任  
享楽性  
孤立感

## 学力低下の原因

いま  
子どもの学力が  
低下したという  
その原因は  
教育制度にあるという

本当にそれだけなの  
日本人が  
やる気をなくしたから  
ではないのか

## 安楽死の倫理！？

安楽死  
してはならない  
ことなれど  
エゴの叫びに  
倫理がすたる

助けが欲しい

検挙率

5件に1件

刑法犯

警備会社の

助けが欲しい

文科省

学力低下で

非難され

学習塾の

助けが欲しい

## 文科省の教育改悪

文科省

改革するたび

教育が

廃れていくのは

何としたこと

## 環境ホルモン

人類は

かつて地球には

存在しなかった

新たな

有害化学物質を

年々作りだしている

その恐ろしさに

日本人ほど

鈍感な国民はない

という

これも

他己を失った国民の

悲しさ

## 自作随筆選

### 虐待の母に終身刑

少し前になるのですが、二月一日付け毎日新聞に、次のような記事が載っていました。私には、とても印象に残る記事でした。その見出しは「押入れに数カ月八歳の娘を虐待 米の母親に終身刑 太陽もテレビも知らず」です。

出だしに、事件の概要と判決の模様を述べた部分があります。そこには次のように書かれていました。

「(ニューヨーク共同) 八歳の娘を数カ月間にわたり狭い押し入れに閉じ込め、満足な食事も与えなかった母親バーバラ・アトキンソン被告(三十)に、米テキサス州ダラス郡の地方陪審は二十九日、児童虐待の罪で終身禁固の判決を言い渡した」と。

皆さんは、この記事を読まれて何を感じられたでしょうか。おそらく日本に比べて格段に重い刑罰であることに驚かれたことだと思います。でも、その受け取り方には二通りあるのではないのでしょうか。一つは、アメリカが余りにも厳罰主義に陥っていると思うもので、もう一

つは、日本の刑が余りにも軽すぎると感じるものです。

私の脳裏に焼きつきましたのは、後者の立場からで、常々、日本の刑罰が余りに軽すぎると考えていたものから、アメリカの刑罰が普通（あるいはもっと言いますと「まとも」）のように思えたのです。

かつて、新潟で、九歳の女性を十年にわたって監禁した被告に懲役十四年の判決が下ったとき、その刑が軽すぎることを「条文金科玉条主義」と題しまして、ホームページの「ひびきのさとだより」に載せたことがあります。このアメリカの母親は、自分の娘をたった数カ月、自分の家の押し入れに閉じ込めただけで、終身刑を言い渡されているのです。

日本では、殺人を犯したとき一番罪が軽いのは、多くの場合、親子間での殺人、つまり親の子殺し、子の親殺しではないかという印象を、私は持っています。つまり、日本では、たいした関わりのない他人よりも、もっとも身近な肉親では、お互いに殺す、情緒的に納得できる事情（動機）が存在したと見なされて、刑罰が軽くなる、ということだと思っております。

ところが、どうでしょうか、アメリカでは肉親（子）をたった数カ月間監禁しただけで、終身刑なのです。日本では、重いはずの他人を十年間も監禁しても、たった

懲役十四年です。なんとという差でしょうか。

私には、社会の成り立ちの根幹は、家庭内の肉親同士の愛情による結びつきにあると考えられるのです。そうした強い愛情で結ばなければならない親子が、その愛を喪失したようなことをした場合には、当然、厳罰に処すべきなのです。他人よりもずっと重い刑罰が課されてしかるべきです。そうしないと、社会は必然的に崩壊に向かっていくのだと思うのです。

私は、かつて、「『人権と平等論』ノート」と題する論文を書きましたが、その中で、刑法200条に定める「尊属殺重罰規定」が憲法の保障する「法の下の平等」に違反するとして、最高裁判所が「父親殺し」に対し、刑法に規定する（死刑又は無期懲役）より軽い刑を言い渡したことを、人倫という、人類普遍的な「法」がないがしろにされていることとして、問題としました。その判決は、確か、昭和58年に出されたと思いますが、それ以来、親殺しに対してはとも軽い刑が言い渡されるようになりました。私は、この判決は法を守るべき最高裁判所が法をないがしろにしている、と思うのです。

今、日本は世界に類を見ないほど青少年の心が荒れています。それは、大人の自己中心的な心の反映なのです。かつて、日本は建前よりも、心のつながりを大切にす

る国でした。制度もそうなっていました。

そこに、キリスト教という建前を大切に作る国で生まれ、育まれてきた民主主義が入ってきました。しかも、悪いことに、その当時、キリスト教に匹敵するような、日本がもっていた、それまでの全ての宗教を失ってしまっていました。

ここに日本の悲劇の始まりがあります。

宗教は人類普遍の人倫をも示すものです。それを喪失したところに民主主義が導入されたわけですから、人倫としてまでも、民主主義の中心的理念である「自己追求の原理」が採用されることになってしまったのです。それが、憲法の中心的原理としても取り入れられました。

欧米では、憲法の上位には「聖書」があります。それは、まさに人倫を示すものです。人びとを導く灯（あかり）なのです。でも、日本には残念ながら、未だに、灯になるものがありません。全ての価値（判断）基準が、「自己追求の原理」でしかないのです。私の言葉でいいますと「他己原理」が失われてしまっているのです。実は、それは、社会を崩壊から護るものであり、人びとを愛によって結び付ける原理なのです。

今や他己原理が無い上に、いや、無いが故に刑罰が軽い日本の行く末や如何、と言いたいところです。

この随筆を、ここまで書いた後、新たに毎日新聞のスクラップをしていましたら、二月十七日付けの三面記事に、幼児虐待の二つの記事が載っていました。それは次のような見出しになっています。

一歳男児が餓死 体重5・5キロ、母が食事与えず

幼児2人放置、母逮捕 食べ物も暖房もなし 「ス

ノボーしてた」

この2件の母親に対して、どの程度の刑罰が下るのか、おそらくアメリカよりはるかに軽い判決が出るのだと思います。でも、判決が出て、多分、もう新聞記事にもならないのだと思うのです。

なにせ日本では、年間、何十人もの子どもが、実の親によつて虐待を受けて死に至らしめられていますし、また、前にも書いたことがあります。かつて日本には、間引きの風習があったとか、動物は弱い子は虐待して殺すのだ、というようなことを言う人すらあるのですから。

多くの人は、日本人が他己（愛情）を失って、自己の追求のみにあくせくしていることに、残念ながら、気付いていません。この米国の母親が我が子を虐待したことに對する、日本よりはるかに重い刑罰は、実は、日本人が如何に、社会全体として愛情（他己）を喪失して来ているかを如実に物語っているのです。

# 釈尊のごとば（一〇九）

法句経解説

（三五一）さとり究極に達し、恐れること無く、無欲で、わずらいの無い人は、生存の矢を断ち切った。これが最後の身体である。

この偈の最後の部分の「これが最後の身体である」ですが、誰でも、死ねば、その人にとって「これが最後の身体である」ということになるように思われるかもしれませんが、でも、ここでは、そんなことを言っているではありません。

これは、自分の「輪廻を断ち切った」ということをいつているのです。釈尊が生存されていた時代のインドには、輪廻（または輪廻転生）の思想がありました。

それは、簡単に言いますと、人間（をはじめ生あるもの）は、解脱しない限り、迷い苦しむ世界である三界六道を輪廻しなければならぬ、というものです。

ここで、三界とは、欲界・色界・無色界のことです。欲界は、欲望にとらわれた生き物が住む世界で、私のことばで言いますと、情動の中の欲望（性欲・食欲・優越欲）の強力に支配する世界（現在の資本主義・民主主義

の世界がそうなっていますが）です。色界（しきかい）は、欲望への執らわれは脱していますが、物質的条件下に執らわれた世界です。最後の無色界は、この物質は存在せず、純粹に精神的な要素のみからなる世界です。しかし、迷いや苦しみが無くなっている訳ではありません。次に、六道ですが、これは、衆生が自らなした業によって生死を繰り返す六つの世界です。順に、地獄・餓鬼・畜生・修羅（阿修羅）・人・天の六つです。インドでは、こうした三界六道の輪廻（生存の矢）を断ち切ったとき、真に苦しみから解放されると考えられていたわけです。

そういう人は、「さとり究極に達し、恐れること無く、無欲で、わずらいの無い人」といえるのです。

さとり究極に達することが、どんなことなのかにつきましても、なかなか言葉で説明しても、ご理解いただけないと思いますが、恐れることが無いとか、無欲であるとか、わずらい（悩み、心配）が無いといったことは、誰にでも分かります。ですから、一つの目安として、そういう状態になったとき、人は、さとり達したと言えると思います。でも、念のために言いますと、無欲には、生への執着がないこと、つまり生死を超越することが含まれることは、言うまでもありません。

後記

一、今年は、とても暖かい冬だったように思えます。もう、そここに春の訪れを感じています。

二、先日、ジャガイモの種を4kg買ってきて、畑に植えました。ジャガイモは、成長が早く、七月のはじめにはもう収穫できます。そして、八月下旬には、また秋ジャガを植えることができます。とても、効率がよい作物だと思えます。

三、一年ぐらい前から、やりかけていた小屋が完成しました。耕運機が2台ぐらいは、楽に入る大きさです。屋根のトタン部分を除いて、柱や腰板など、すべて頂いた廃材で建てました。入口にはシャッターが付いています。が、それも頂き物です。また、昨年十一月には、知り合いの方から、古い七・五畳のプレハブを頂き、自分ではらして、持って帰り、空き地に建てました。何人かに手伝ってもらいましたが。

四、買った土地にも、いろいろな建物(?)が建っています。書庫2棟、物置大1棟・小1棟、お堂、小さなサイクルハウス、大きなパイプハウス(ユニボ格納)、例のプレハブと小屋、それに、いま、工事現場にあるようなトイレを分けて頂いて、設置の工事中です。

五、さつまい芋の食べ方ですが、最近、また新しい食べ方

を工夫しました。その方法を紹介します。

六、洗って、皮をむき、5ミリから1センチの厚さに切る。水にさらしてアクをとり、塩と砂糖を少し加え、ひたひたの水で煮る。煮えたら水を切り、鍋に戻して、フオークでつぶす。それに、みりん、蜂蜜、卵、ヨーグルトを適当に入れて、しゃもじでかき混ぜながら卵に火が通るまで弱火で煮る。

七、三十分程度でできます。簡単ですが、結構、おいしいです。冷やしたほうが、もっとおいしいですが。なお、みりんと栗の瓶詰を入れれば、栗きんとんです。

八、政治に関わる人たちの倫理観の喪失が目立ちます。

月刊 こころのとも 第十三巻 三月号 (通巻 一四七号)	平成十四年三月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（よ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

